

現代に生きる 近松

門左衛門

その魅力と尼崎のまちづくり

「この世の名残、夜も名残。死に行く身をたとふればあだしが原の道の霜。一足つつに消えてゆく、夢の夢こそ哀れなれ」。江戸後期の浄瑠璃作家、近松門左衛門（1653～1724）の不朽の名作「曾根崎心中」の道行きの場面だ。徳兵衛とお初。2人の哀しい愛の物語は、時代を超えて人々の心を打つ。

「冥途の飛脚」「国性爺合戦」「心中天の網島」「女殺油地獄」…、発表から300年たっても近松作品は文楽や歌舞伎などでいくども上演される「キラークンテンツ」だ。

この近松の墓所があるのが兵庫県尼崎市だ。隣接して記念館もある。同市は「近松」をまちづくりのシンボルと位置付け、さまざまな事業を展開してきた。折しも今年は市制施行100周年。東京と尼崎を歩いて現代に生きる近松、そして上方芸能の魅力を探ってみよう。

（神戸新聞東京支社編集部長兼論説委員・加藤正文）

曾根崎心中

今年5月、東京・三宅坂の国立劇場で文楽の「曾根崎心中」が上演された。初演は1703（元禄16）年5月、大坂竹本座。その前月に実際に起きた心中事件を基にして近松門左衛門がすかさず書いた浄瑠璃だ。この興行は大評判になり、「時代物」として歴史上の出来事を扱う作品が多かった人形浄瑠璃の世界に、市井の人々のドラマを描く「世話物」が誕生した。

しかし、この作品の影響で心中が流行し、幕府の取り締まりの強化もあって上演が途絶えてしまう。再び日の目を見たのは250年以上たった1955（昭和30）年というから驚いてしまう。

醤油屋の手代、徳兵衛。天満屋の遊女、お初。思い合った若者同士の初々しい所作に目を奪われる。物語が進むにつれて、舞台上の人形



JR尼崎駅北側に立つ近松門左衛門「冥途の飛脚」のヒロイン梅川の像

が人形であることを忘れてしまう。死出の旅へと向かう男女の動き。文楽に詳しい作家の赤川次郎は「プッチーニの『ボエーム』や『蝶々夫人』の悲痛なラストに通ずる切なさを持っている」と解説する。

歌舞伎は生身の人間が演ずる分、役者の個性が前に出る（それが魅力でもある）。例えば、高齢で恰幅のよい女形が傾城や娘を演ずると、見る方はその世界に入り込みにくい部分がある。一方、人形によって表現される文楽は、娘役は娘の人形、老人は老人の人形を使うので「役と演者の年齢のギャップを想像力で埋める」という作業が必要ない（赤川）。名人が操る人形は想像力の翼に乗って美女は最高の美女に飛翔する。

文楽の世界を快作『仏果を得ず』で描いた作家三浦しをんの表現が卓抜だ。「生身の肉体をため『人形』というワン・クッションを通すと、人間の演技では表現できないなにかが、純粹に形になる瞬間がある」

「きわめて高い水準」

国立劇場は歌舞伎や文楽、舞踊、邦楽、雅楽といった伝統芸能の殿堂だ。さまざまな公演が行われる中でとりわけにぎわいを見せるのがこの文楽公演だ。会場には常連のほか若者や外国人の姿もある。

文楽公演の入場率はこの10年ほどは90%近くと「きわめて高い水準」（同劇場）を維持している。歌舞伎公演（60%前後）をはるかに上回るのだ。50%近くにまで落ちた1980年代がうそのような人気だ。

ブームの背景には、ベテラン勢の相次ぐ引退で「今、見ておかない」というファンが押し寄せたことがまず考えられる。2014年5月には文楽界で初めて文化勲章を受章した竹本住太夫、そして同年7月には竹本源太夫が82歳で引退（15年死去）。16年2月には人間国宝の豊竹嶋太夫（84）が退き、3月には人形遣いの人間国宝、吉田文雀（兵庫県西宮市）も87歳で引退を発表した。16年8月に死去。いずれも戦後の文楽を支え続けた名人たちだ。

さらに文楽の本拠地、大阪で当時の大阪市長橋下徹が文楽への補助金削減を打ち出したことが波紋を広げ、皮肉なことに芸能としての文楽の魅力が脚光を浴びたことも考えられる。

国立劇場は今年11月で開場50周年を迎える。歌舞伎は松竹という民間資本が主体だが、文楽は国立劇場と大阪の国立文楽劇場の二つの拠点が中心だ。文楽は国立が支えているという意識は強い。50周年の記念事業の一環で来年2月には近松の名作選を上演する予定だ。

文楽と兵庫県

国の重要無形文化財、国連教育科学文化機関（ユネスコ）の世界文化遺産である文楽。そのルーツは兵庫県に関わりが深い。

1600年前後、西宮や淡路を本拠地に人形でえびす神の功德を説いた傀儡師が、京都の浄瑠璃太夫と結び付き、人形浄瑠璃の原形になったとされる。さらに淡路出身の植村文楽軒が大坂に興じた小屋は明治期、「文楽座」と呼ばれて人気を集め、その名が人形浄瑠璃の代名詞となった。

そして希代の劇作家、近松門左衛門の登場だ。近松ゆかりの尼崎市のホームページによると、近松は1706年の春、住み慣れた京都から大阪に移り住み、大阪の船問屋・尼崎屋吉右衛門宅にたびたび逗留していた。その船問屋が、尼崎市の久々知にある広済寺を1714年に再興した住職・日昌上人の実家と言われる。日昌上人と近松は親しく交際していたことから広済寺の再興には建立本願人となって大きく貢献する。

1716年9月に母親が亡くなったときも、広済寺で法要を行い、供養のために色紙などを納めている。この寺とのつながりが深かった様子が伺える。近松と尼崎とのかかわりは晩年の十数年間。1724年11月22日、72歳で生涯を終え、広済寺の墓(国指定史跡)で眠っている。

女殺油地獄

2016年4月の明治座の花形歌舞伎の目玉は「女殺油地獄」だった。1721(享保6)年7月、大坂竹本座で初演された。「曾根崎」と同様、実際に起きた事件を基に近松が書き、2カ月後の完成。文楽に続いて歌舞伎でも上演された。このように江戸時代には人形浄瑠璃で大当たりした作品を歌舞伎がすぐに取り入れることがしばしばあった。

放埒な若者が何の落ち度もない人妻を殺害するという、当時の通念とはかけ離れた内容だったのでその後、上演の機会を失っていた。明治になり、坪内逍遙が「近松研究会」で感情のままに行動する主人公の与兵衛について論じたことをきっかけに1907(明治40)年に女芝居、

1909(同42)年に歌舞伎として上演された。以来、映画、新劇、現代劇とさまざまな分野で取り上げられるようになった。

不良青年である与兵衛の人物描写、残酷さの中に美しさがひそむ「殺し」の場面が目され、そのテーマや芸術性が再評価されている。流れる油に足を取られつつ暗闇の中で行われる「お吉殺し」はあまりに生々しく、すさまじい迫力だ。

この日の舞台は河内屋与兵衛を尾上菊之助、女房お吉を中村七之助という清新な配役。七之助は前月にも、近松の「心中天の網鳥」を基にした「ETERNAL CHIKAMATSU(エターナル・チカマツ)」にも主演している。

虚実皮膜

「近松には独特の懐の深さがある。栄枯盛衰をへて今に至るのも、作り手が新しい要素を加えてきたから」。国立劇場で長く制作を担当した理事大和田文雄は話す。

それにしても300年前の近松作品の息の長さには驚いてしまう。映画、オペラ、舞台と絶えず新しい企画が生まれる。

この5月には兵庫出身の脚本家藤本有紀がNHK木曜時代劇「ちかえもん」で向田邦子賞を受けた。名作「曾根崎心中」の誕生前夜、スランプに悩む近松門左衛門を取り巻く人間模様をコミカル描いた時代劇だ。

帝国ホテルであった授賞式会場には脚本が展示されていた。巻頭に近松の言葉が書かれていた。《虚(うそ)にして虚にあらざ、実にして



本堂東側に位置する近松門左衛門の墓=尼崎市久々知1、広済寺



近松門左衛門をしのぶ「近松祭」に合わせ、浄瑠璃人形を操って墓参りする吉田文雀さん(故人)=2008年10月、尼崎市久々知1、広済寺

現代に生きる近松門左衛門 ～その魅力と尼崎のまちづくり～



近松門左衛門が使ったとされる机などが並ぶ＝尼崎市久々知1、近松記念館

実にあらず、この間に慰^{なぐさみ}が有^あたもの也」
虚が実を強め、実もまた虚を強める。有名な「虚実皮膜」論だ。虚実を行き来する中にリアリティーが生まれるというのだ。

近松の町

尼崎市―。臨海部に重厚長大産業の工場が立ち並び、「工都」としばしば言われてきた。独自技術をもつ中堅中小のものづくり企業が多いが、一方で数々の負の問題が古くから市民を苦しめてきた。

工場や道路から発生した深刻な公害問題、J R脱線事故、連続変死事件、アスベスト公害などが相次ぎ、芦屋や西宮、伊丹などがそろって阪神間にあって都市イメージがよいとは決して言えない。

その中であって近松は尼崎市が強く打ち出したいと願ってきた都市イメージだ。前述の近松の墓所が同市北部にあり、隣接して記念館がある。1986年の市制70周年の際、シンボルと位置づけ、「近松」を核とした文化・教育・産業・環境整備の「トータルなまちづくり」を目指してきた。

毎秋、文楽人形による幕前祭や地元小学校の浄瑠璃が行われてきた。優れた劇作家を育成する「近松賞」の制度もある。しかし市民が近松作品そのものを十分知らないにしても、多彩な文化が街に息づき、だれもが認める「文化都市・尼崎」になっているかというと考え込んでしまう。文化は市民が自発的に創造するものだが、自治体はそれを支持し、受け入れる（ソフト、ハードの）器をつくるのが役割だろう。

2016年は市制100周年。記念事業のテーマは「知れば知るほど、あまがすぎ」だという。「伝統と革新」を体現してきた近松の精神を受け継ぎ、都市の文化を足元から盛り上げたい。（文中敬称略）

※参考・引用文献

- 赤川次郎『赤川次郎の文楽入門―人形は口ほどにものを言い』（小学館文庫、2007年）
- 三浦しをん『あやつられ文楽鑑賞』（双葉文庫、2011年）
- 国立劇場、明治座のパンフレット
- 神戸新聞記事、文化庁デジタルライブラリー
- インターネットサイトの記事

◇近松門左衛門年譜

年代	できごと
1653(承応2)年	近松、福井で出生
1655(明暦元)年	父とともに現在の鯖江市へ移住
1667(寛文7)年	父が浪人し、京都へ移り住む
1683(天和3)年	「世継曾我」上演（劇作家として世に認められた最初の作品）
1703(元禄16)年	「首根崎心中」上演（最初の世話物）
1706(宝永3)年	京都から大阪へ移り住む
1707(宝永4)年	「五十年忌歌念仏」上演（作品の中に「尼崎」が描かれている）
1711(正徳元)年	「冥途の飛脚」上演
1714(正徳4)年	日昌上人が尼崎の広済寺を再興。近松は建立本願人として貢献する。
1715(正徳5)年	「国性爺合戦」上演
1716(享保元)年	近松の母没。広済寺で法要
1718(享保3)年	「日本振袖始」上演
1720(享保5)年	「心中天網島」上演
1721(享保6)年	「女殺油地獄」上演
1724(享保9)年	1月「関八州繫馬」上演（絶筆）。11月22日、近松没（72歳）

（尼崎市ホームページから作成）

メモ

財団法人近松記念館

近松が広済寺にあった「近松部屋」で執筆活動をした時に使っていたと言われる文机や過去帳、近松が広済寺復興の際に寄進した巻物など約100点を展示。生涯を紹介したコーナーもある。兵庫県尼崎市久々知1の4の38。電話06・6491・7555。午前10時～午後4時。水曜日、第2日曜日休み。お盆、年末年始も休み。